

伊勢国府跡 24

2022年3月

鈴鹿市

例言

1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が令和3年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第41次）調査の概要をまとめたものである。

2 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市 市長 末松則子

調査指導 石田由紀子（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員）

小澤 毅（三重大学人文学部教授）

金田章裕（京都大学名誉教授）

和田勝彦（財団法人文化財虫歿害研究所常務理事）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

文化庁文化財部文化財第二課 三重県教育委員会事務局社会教育・文化財保護課

三重県埋蔵文化財センター

調査担当 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

文化財課長 野呂和伸

副参事兼発掘調査グループリーダー 常山隆宏

発掘調査グループ 副主幹 田部剛士

事務職員 前田有紀

再任用職員 藤原秀樹

3 発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

鈴鹿市広瀬町字長塚 1252番1〔6AFG-B区〕面積 142m²

字長塚 1254番〔6AFG-C区〕面積 383m²

字長塚 1255番〔6AFG-D区〕面積 386m²

調査期間 令和3年11月15日～令和4年2月14日

4 現地調査は前田が担当した。本書の執筆・編集は前田が担当した。

5 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕 加藤忠昭・越山 武・木村芳雄・酒井新治（三重県シルバー人材センター連合会）

〔屋内整理〕 加藤利恵・永戸久美子・前出みさ子（文化財課パートタイム会計年度任用職員）

6 Fig.1では国土地理院2万5千分の1地形図「鈴鹿」「亀山」の一部を、Fig.2では国土地理院20万分の1地勢図「名古屋」の一部を加工して使用した。

7 座標は過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第VI系を用いている。なお、図中の方位は座標北を示す。

8 本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9 調査及び報告書刊行にあたっては上記調査指導の個人・団体の他に、地元各位をはじめ、下記の方々のお世話をになりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

龜山市生活文化部文化スポーツ課まちなみ文化財グループ・田中明・広瀬町自治会・鈴鹿市シルバー人材センター

目次

例言	i
目次	ii
I 遺跡の位置とこれまでの調査成果	1
II 調査の経過	3
III 発掘調査	4
1 調査の目的と方法	4
2 調査の成果	4
(1) 基本層序	4
(2) 1トレンチ	4
(3) 2トレンチ	5
(4) 出土遺物	5
IV まとめ	5
参考文献	6

表目次

Tab.1 調査履歴	2
Tab.2 報告書抄録	17

図版目次

Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡	7
Fig.3 調査区位置図	8
Fig.4 6AFG-B・C・D区 1トレンチ遺構配置図	9
Fig.5 6AFG-B区 2トレンチ遺構配置図	10
Fig.6 溝 SD376・SD377 土層断面図	10
Fig.7 北方官衙 長塚南東区周辺で確認された建物	11
Fig.8 北方官衙 長塚南東区内で確認された建物	12
Fig.9 出土遺物実測図	13

写真図版目次

Plate 1 1トレンチ全景（南から）	
1トレンチ全景（北から）	
溝 SD376（東から）/溝 SD376（南から）	
溝 SD377 南半（東から）	
溝 SD377 北半（東から）	
溝 SD377（南から）	
土坑 SX378（東から）	14
Plate 2 土坑 SX379（東から）	
手前：土坑 SX379 奥：土坑 SX378（北東から）	
2トレンチ全景（西から）	
2トレンチ全景（東から）	
2トレンチ西端撓乱検出状況（北から）	
2トレンチ西端撓乱完掘（北から）	15
Plate 3 出土遺物	16

I 遺跡の位置とこれまでの調査成果

史跡伊勢国府跡（長者屋敷遺跡：以下、遺跡としては「長者屋敷遺跡」）は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に所在する。一帯は標高約49mの台地で、鈴鹿山脈の裾野に広がる水沢扇状地の中期面に相当する。台地南面に広がる谷底平野との比高差は約20mである。

遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に、南半は西富田町に属する。また、遺跡の西半は亀山市能褒野町に及んでいる。当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり、水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がるほか、牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や基壇・土壘状の高まりが各所にみられるところから「矢鉄長者」の伝説が伝えられ、古くより知られている。遺跡の範囲は南北約1,300m×東西約700mと広いが、瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約800m・東西600mに限られる（村山1992）。瓦散布範囲の南端中央で平成5（1993）年度に国府政庁（以下「国庁」）が確認され、その後国庁の北方で発見された建物群（北方官衙）を合わせた3地点合計73,940㎡が、平成14（2002）年3月19日に伊勢国府跡として国の史跡に指定され、平成29年10月13日に北方官衙の一部1,409㎡が追加指定された。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は8世紀中頃から9世紀初頭と狭い範囲に限られる。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残される。古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。延喜式に知られる伊勢国の鈴鹿・河曲・朝明・榎撫の各駅家を経由して尾張国に至る経路のうち、鈴鹿駅家は鈴鹿関付近に、河曲駅家は伊勢国分寺跡および隣接する河曲郡家（狐塚遺跡）周辺に位置したことは疑いない。古代官道の遺構としては、鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が9mの道路痕跡が発見されている（林2005）。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられ（田部2016）、鈴鹿市国府町と同国分町の伊勢国分寺跡を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古厩（鈴鹿駅家推定地）と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると、鈴鹿関が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い、官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられ、長者屋敷遺跡の国府の整備もそれに伴うと考えられるが、鈴鹿川左岸の官道の実態は未だ不明である。

長者屋敷遺跡で国府政庁が確認されるまでは、鈴鹿市国府町が、「国府」という地名とともに、伊勢国総社に比定されている三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が残ることなどから、伊勢国府の所在地と考えられてきた。伊勢国府推定地の範囲内においても各所で調査が行

われている。三宅神社遺跡の第1次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された（新田1997）。第2次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が（藤原1997）、第5次調査では墨書き器や斎串などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認されている（林2001）。また、天王山西遺跡では施釉陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている（杉立2001）。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安時代末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている（石田2001）。また、富士遺跡では鋳造遺構が検出され（田部2007）、黒色土器が多く出土した（吉田隆2008）。このように、国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布し、鈴鹿郡家および初期・後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられるが、官衙と決定付けられる遺構は未確認である。

さて、長者屋敷遺跡における発掘調査は昭和32（1957）年に遡る。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行っていた京都大学の藤岡謙二郎らが鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り調査を行った。当時、国府町に国府方八町域を想定していた藤岡らは、長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも、鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した（藤岡ほか1957）。

鈴鹿市では平成4（1992）年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し、平成5（1993）年度の「矢下」地区における国庁の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した（藤原ほか1995）。国庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土居南」の各区画（区画の通称はFig.3参照）において瓦葺礎石建物群（以下「北方官衙」）が発見された（新田1997・1999ほか）。

また、三重県埋蔵文化財センターによる北西域の緊急調査によって北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなつた（宇河1996）。調査を担当した宇河雅之は国府国庁域を含む南北6区画・東西5区画の方格地割を想定し、北端に位置する金敷を平城宮における松林苑に相当すると考えた（宇河1973）。方格地割はその後の調査で北方官衙域において区画施設が徐々におさえられる一方（吉田真2004・水橋2005・小倉2006）で、国庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全く確認されなかつた（吉田真2004・水橋2005）。

平成25（2013）年度の第31次から第34次調査において宇河の方格地割案の北西部及び東部の確認調査を行つたが、いずれも区画溝等は確認されなかつた。結局、方格地割で確実なものは南北大路を中心に東西4区画・南北3区画と考えることが妥当とされた（新田2013・

Tab.1 調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積(m ²)	調査原因	概要	報告書番号
プレ 1次	1957	A地点	広瀬町字南野		-	学術	礎石建物	
		B地点	広瀬町字矢下				基壇	
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚 1247,1248	921110～930129	110	学術	建物・礫敷き遺構	国・長
		南野1	広瀬町字南野 971		115		建物	
		荒子1	広瀬町字荒子 981		110		瓦溜・溝	
2次	1993	6AHI-F、 6AJA-A ほか	広瀬町字中起 1226・矢下 1134 ほか	931129～940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝 東外溝・西外溝	国・国
3次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字矢下 1131～1133	941006～941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝 西外溝	国・国2
3-2次	1994	県調査区	広瀬町字中土居,龜山市能褒野町字 中土居	940601～940817	2,700	県緊急	溝	
4次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字矢下・荒子・中起	950920～951219	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西隅楼	国・国3
4-2次	1995	県調査区	広瀬町字中土居,龜山市能褒野町字 中土居	950605～950713	1,600	県緊急	溝	
5次	1996		広瀬町字丸内	960620～960716	133	市緊急	豎穴住居・溝	埋文年報IV
6次	1996		広瀬町字矢下	960625～960719	288	市緊急	溝	
7次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野 972番・972番1 972番2・973番	961007～970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝	国・国4
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279番2	971016～980210	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝	国府跡
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	980223～980320	21	市緊急	政庁南辺部	埋文年報V
		B地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿	
		C地区	広瀬町字中起		5		溝	
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279番3・1279番5	980901～981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑	国府跡
11次	1999	6AJA-H ほか	広瀬町字矢下 1176番ほか	990901～000131	863	学術	溝・礎石建物・南門	国府跡2
12次	2000	6AHI-CF ほか	広瀬町字中起・荒子	001001～010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・豎穴住居・溝	国府跡3
13次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字中起 1237番・1240番 1-3・1241番	010920～020214	714.2	学術	溝・土坑	国府跡4
14次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中土居 1282番1	020106～020111	246	市緊急	礎石建物・溝	国府跡4
15次	2002	6AJJ-D ほか	広瀬町字矢下 1154番ほか	020424～020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓	国府跡5
16次	2002	6AJF-B ほか	広瀬町字矢下 西富田町字東起・矢卸	020620～020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓 古墳周溝・方形周溝墓	年報5
17次	2002	6ADB-A-E	広瀬町字西野 3300番	020806～021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・豎穴住居	
18-1次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下 1126番	030417～030630	243	学術	溝	国府跡6
		6AJD-E	広瀬町字矢下 1144番	030421～030630	267		溝	
		6ALE-A	西富田町字矢卸 1015番17	030528～030630	21		なし	
		6ALE-B	西富田町字矢卸 1015番17	030528～030630	11		なし	
		6ALC-G	西富田町字矢卸 1015番15・16	030528～030630	48		なし	
18-2次	2003	6AEAA	広瀬町字中土居 1283番2	030902～	360		溝・土坑	
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内 2609番1	040831～041118	220	学術	溝	国府跡7
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290番1	040913～041118	200		なし	
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275番	040928～041118	550		豎穴住居	
20次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内 2606番1・2607番1 1・2608番1	050822～051130	200	学術	溝	国府跡8
		6AGF-A	広瀬町字南野 945-6	051011～051130	140		溝	
21次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719～060908	500	学術	溝・土坑	国府跡9
22次	2007	6ADC-A	広瀬町字西野 3311	071001～071206	326	学術	風倒木・ピット	国府跡10
23次	2007	—	亀山市			亀山市緊急	溝	
24次	2008	6AEB-C	広瀬町字中土居 1282番2	080616～080717	835	市緊急	溝・攢乱坑多数	国府跡11
25次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野 3243番・3248番	081001～081226	690	学術	溝・礫敷き遺構	
26次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野 3313番	081218～081226	55	学術	溝・土坑・風倒木	
27次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚 1244番	090817～091216	580	学術	溝(道路跡)・ピット・風倒木	国府跡12
28次	2010	6ABA-B	広瀬町中土居 1305番1	101101～110131	59	学術	なし(風倒木のみ)	国府跡13
29次	2011	6ABA-C	広瀬町中土居 1299番1	111201～120229	116	学術	溝	国府跡14
30次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内 2612番1	121201～130228	81	学術	なし	国府跡15
31次	2013	6AAC-D	広瀬町字丸内 2600番1	140122～140314	140	学術	ピット	国府跡16
32次	2013	6AFF-F	広瀬町字丸内 2626番	140218～140328	63	学術	なし	国府跡17
33次	2014	6AIB-C	広瀬町字荒子 1038番	150105～150304	61	学術	ピット	
34次	2015	6AGH-C	広瀬町字南野 955番3	160201～160315	132	学術	溝・風倒木	国府跡18
		6AIF-E	広瀬町字荒子 985番		81		溝・土坑・風倒木	
35次	2016	6AIF-A	広瀬町字荒子 981番	170113～170309	89.4	学術	溝	国府跡19
		6AIF-F	広瀬町字荒子 982番		69.6		溝	
36次	2017	6AHE-D	広瀬町字中起 1234番	170901～171130	210	学術	溝・ピット	国府跡20
		6AIB-D	広瀬町字荒子 1039番		149.5		溝(道路側溝)・ピット	
		6AKB-C	西富田町字東起 1349番		72		風倒木	
37次	2018	6AIA-A	広瀬町字荒子	181213～190303	69.3	学術	溝・ピット	国府跡21
38次	2019	6AKC-C・D・E	西富田町字東越 1322番・1323番 1324番	190712～190920	380	緊急	豎穴住居・土坑・ピット(縄文) 土坑・溝	年報22
39次	2019	6AGD-G	広瀬町字南野 955番2	191205～	144.2	学術	溝・風倒木	国府跡22
40次	2020	6AFF-B	広瀬町字長塚 1248番1	200831～201119	399.04	学術	礎石建物・溝(築地)・溝・土坑 ピット・風倒木	国府跡23
		6AGF-A	広瀬町字長塚 1249番		11.69		礎石建物?・溝	
		6AIA-F	広瀬町字荒子 1030番		171.15		溝(築地)・風倒木	
41次	2021	6AGF-B・C・D	広瀬町字長塚 1252番1・1254番 1255番	211115～220214	136.97	学術	溝	国府跡24
合計					28711.07			

国・長:『伊勢国分寺跡(5次)・長者屋敷遺跡(1次)』 国・国:『伊勢国分寺・国府跡』
 埋文年報:『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』 年報:『鈴鹿市考古博物館年報』

藤原 2014・2015)。

北方官衙の北に位置する金藪は、長者伝説の舞台として知られ『高津瀬村誌』には「金藪」の項に「古長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ若シ廣瀬村ヒヘイニ陷ルノトキハ之ヲ掘レト」と記される(水野 1907)。こうした口伝の存在からか、金藪の発掘は古来忌避されており、昭和の初めに陸軍北伊勢飛行場が建設された際も金藪を避けて軍用地が定められた。現状は一見前方後円墳を思わせる高まりとなっている。地権者の意向で本体の発掘調査は行えず、測量調査のみを行った(田部 2008)。外周部の調査の結果(田部 2007・2009)によれば、何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えられた。また、方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅 24m の南北大路が金藪や国庁の中軸線と一致することが確認され、三者の計画的な関連性は確実であるとされた(田部 2010)。さらに、近年の調査で南北大路の西側溝にあたる溝が北方官衙と国庁の間にも延びることが確認された(藤原 2018)。このように街路による整然とした区画から、単なる地割というより方格街区と呼ぶことがふさわしいとされた(藤原 2019)。

しかし、国庁と方格街区の間では若干の工房様の掘立柱建物と竪穴建物が検出されたのみで(新田 2001)、遺構密度が低く、官衙的な建物や区画施設がほとんど確認されず、およそ南北幅約 150 m が空白地帯となっている。平成 26 年度以降はこの範囲において調査が進められ、北方官衙の南東隅に当たる「南野南」区の南に接して、「荒子東」区と呼ぶべき院(区画)が存在することが判明し、内部に瓦葺礎石建物が建てられていることも確認された(藤原 2016・2017・2019)。とはいえ、政庁の周囲では相変わらず建物等の確認にはいたっていない。

II 調査の経過

令和 3 年 11 月 15 日に第 41 次調査地の賃貸借契約が締結され、同時に現地作業に入った。史跡指定前の踏査では地表にいくつもの瓦の散布が確認されており、また区画の西半では瓦葺礎石建物が検出されていることから、東半でも同様の建物の存在が期待される土地である。

令和 4 年 2 月 14 日にすべての調査区を埋め戻し現地調査は終了した。本来ならば発掘調査期間内に発掘調査指導会議を開催し、現地での指導を仰ぐところではあるが、市のコロナウイルス感染症対策の方針に基づき、発掘調査指導会議の開催は見送った。

以下、調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

《調査日誌抄》

令和 3 年 11 月 15 日(月) 晴 6AFG-B・C・D 区を除草後、重機にて南北方向の 2 m 幅トレーナー(1 トレーナー)を設定、表

土除去。一旦部分的に地山が混じる面まで掘り下げるが、広範囲にわたり搅乱されていることが判明したため、途中からトレーナー幅を 1 m に狭め表土除去を続行。ピュアな地山面までの深度を確認するため、1 × 1 m の深掘を 3 箇所実施したところ、2 箇所で溝状の落ち込みを確認(最北の落ち込みは後に溝 SD376 と判明)。

11 月 16 日(火) 晴 重機にて 1 トレーナーの東側に東西方向の 2 m 幅トレーナー(2 トレーナー)を設定。一旦地山の混じる面まで表土除去を行なったが、現地表面から -0.9 m 地点で空き缶等が出土したため、広範囲にわたり著しく搅乱されているものと判断。トレーナー北半のみを地山面まで掘削(=搅乱層除去)したが、東側に至っては地山下層の礫層が露出するほどであった。西端ではやや方形の土坑を確認するも、後に搅乱と発覚。

11 月 24 日(水) 晴 作業員投入。1 トレーナー壁立て・清掃。

11 月 25 日(木) 晴 1・2 トレーナー壁立て・清掃。

11 月 26 日(金) 晴 前日の作業を継続。1 トレーナー北半写真撮影。

11 月 29 日(月) 晴 1 トレーナー南端・2 トレーナーの壁立て・清掃・写真撮影。

11 月 30 日(火) ~ 12 月 10 日(金) 調整のため休業。

12 月 13 日(月) 晴 / 時雨 1 トレーナー搅乱層を人力にて除去。搅乱層出土遺物は 5 m 間隔で取り上げ。

12 月 14 日(火) 晴 前日の作業を継続。地山面はまだ見えない。

12 月 15 日(水) 晴 搅乱層除去作業を継続。黒色~黒褐色の落ち込みを確認するが、遺構か取り残した搅乱層かの判断に苦しむ。そこで、トレーナー西壁側にジョレン幅のサブトレーナーを設定し地山面までの掘削を試みたところ、東西方向の溝状の落ち込みを確認。南から SD01・02・03 と仮称し遺物を取り上げる。SD01・02 (SX378・379 として報告) については断面の状況から搅乱である可能性が浮上。

12 月 16 日(木) 晴 サブトレーナー掘削作業を継続。最北の落ち込み(仮称 SD04)は検出途中で全体が見えていないが埋土から遺構と判断、SD377 と改称。並行して 2 トレーナー西端で検出したやや方形の土坑を半裁、空き缶が出土したため搅乱と判断。午後休業。

1 月 6 日(木) 雪 仕事始め。SD377 以北の搅乱層除去作業完了。トレーナー西壁側に SD377 断面確認サブトレーナーを作成。

1 月 7 日(金) 晴 / 曇 指導会議(現地視察)に備え 1 トレーナー清掃。仮称 SD03 を SD376 と改称。写真撮影。

1 月 13 日(木) 晴 水糸を設定し 1 トレーナー平面図作成。1・2 トレーナーの端に打設済みのピン・杭に座標を振り込む。SD376・377 断面に水糸を設定。

1 月 14 日(金) 指導会議中止が決定。

1 月 20 日(木) 晴 / 雪 撤収作業。並行して 1 トレーナー平面図及び SD376・377 断面図作成。

1 月 21 日(金) 晴 午後 1 トレーナー平面図作成。

1 月 22 日(土) 晴 1・2 トレーナー平面図作成。座標振り込み。

1 月 24 日(月) 晴 2 トレーナー平面図作成。

1 月 25 日(火) 曇 午後 土色記録。

2 月 2 日(水) 晴 レベリング。

2 月 3 日(木) 晴 振り込んだ座標に不備があり再度作業。

2月7日（月） 晴 表土除去の際に伐採した雑木の処理。
2月8日（火） 晴 前日に同じ。作業員撤収。
2月11日（金） 晴 重機にて埋め戻し開始。
2月12日（土） 晴 埋め戻し完了。現地作業は全て終了。

III 発掘調査

1 調査の目的と方法

一昨年度の国史跡伊勢國府跡調査指導会議において、ここ十数年継続してきた北方官衙・方格街区の外周部の確認調査にある程度目処がついたことから、方格街区の史跡未指定範囲について区画施設と併せて内部の調査も実施して遺構の遺存状況を把握し、今後の追加指定につなげていくという方針が了承された。

このことに伴い、今年度の調査は方格街区のうち既に史跡指定されている南野南区・長塚南西区の間に位置しながら、未だ史跡指定を受けていない長塚南東区を対象として実施することにした。

長塚南東区では、平成4年度に第1次調査として長塚1区、令和2年度に第40次調査として6AFF-B区・6AFG-A区の発掘調査が実施されている。長塚1区では「建物規模及び礎石建物、掘立柱建物の何れかも不明であるが」「幅60cmの東西の土手状遺構と、その内部（南側）に明らかに故意に埋め込んだ黄褐色土混入黒灰色粘質土層」を検出し、「土手状の遺構は建物基壇を形成する際の周堤」と考え建物SB02（第40次調査から「SB002」と呼称）とすると報告されている。また6AFF-B区（長塚1区に一部重複）ではSB002未検出箇所と、その北東に新たにSB370が確認されている。いずれも瓦葺礎石建物であることが分かった。

これらを含め、過去の調査はいずれもひとつの街区の西半にて実施されていることが指摘されている。官衙遺跡ということに加え、長塚南西区の南門の存在もあって、漠然と中心軸に対して左右対称な建物配置というイメージが抱かれてきたのであろう。そこで今回、長塚南東区の東半にあたる6AFG-B・C・D区を調査対象地とし、第1次・第40次調査で検出された礎石建物と対になる建物配置が存在するか否かの確認を試みた。

作業は、小型重機を用いて表土耕作土を除去した後に、人力で遺構検出を行った。遺構は原則検出のみにとどめ、搅乱等により遺構の掘方の認定が困難な部分および溝の断面記録が必要な部分にのみ幅0.3m前後のサブトレーナーを設定して掘削を行った。

調査区及び検出した遺構は、県道辺法寺加佐登停車場線と調査区西側の水路側溝に既設の3級基準点基-4・基-5から日本測地系に基づく座標と水準高を振り込み、設定ピン・水糸を用いて平面実測した。写真は、35mmデジタル一眼レフカメラで撮影した。

2 調査の成果

(1) 基本層序

調査地の地目は畠となっているが、現在は耕作は行われておらず、東半は雑木が生い茂っている。南方・東方に向かってわずかに傾斜するものの、ほぼ平坦といつてよい地形である。6AFG-B・C・D区に設定した1トレーナーにおいて、地表は北端で標高50.2m、南端で49.8m前後、遺構検出面（地山検出面）は北端で標高49.4m、南端で49.2m前後を測る。6AFG-B区に設定した2トレーナーにおいては、地表は東端で標高49.7m、西端で49.9m前後である。地山検出面は東端で標高48.8m、西端で49.1m前後を計る。

基本層序は、第I層：黒色シルト（クロボク）やにぶい黄褐色シルト等が幾重にも堆積する層（搅乱層）、第II層：褐色粘質シルト（地山）、第III層：礫を多く含むにぶい黄褐色砂質シルト（地山下層）となる。第I層は實際は複数に分層することができるが、現代の廃棄物等を含む層であることから一括して捉えた。著しい搅乱の様子が見て取れる。

(2) 1トレーナー

長塚南東区東半において礎石建物SB370の対となる建物の存在を確認するため、6AFG-B・C・Dの3区にまたがる形で幅2m×延長40mの南北方向トレーナーを設定した。

重機にて南から北へ向かって表土除去を行ったところ、直ちにごみを含んだ土やクロボクが不規則に入り混じる分厚い層が確認され、著しく搅乱を受けていることが発覚した。一旦、前年度に隣接地を調査した際の遺構検出レベル付近まで掘り下げたが、均質な地山の面には到達せず、トレーナー南端を深堀りしてようやくピュアな地山が露出したのは、現地表面からおよそ-0.6mの地点であった。

搅乱は広範囲にわたり、かつ遺構残存の可能性も低いと予想されたため、途中からトレーナー幅を1mに狭めて表土除去を続行した。とはいえたるか、搅乱と搅乱の間に遺構が残存する可能性も十分に考えられることから、ひとまずは重機にて部分的に地山が見える面まで掘り下げ、残った搅乱層は人力で除去することとした。なお、地山面レベル確認のため重機にて1m×1m程度の深掘トレーナーを南端のほかに2箇所作成したところ、最も北のトレーナーで黒色の落ち込みが確認された（後に溝SD377の南肩と判明）。

人力での搅乱層除去は、1mのトレーナー幅をさらに半裁した西側で実施した。その結果、トレーナー北半にて東西方向に走る溝2条の底部がかろうじて残存していることが確認されたため、その箇所のみ上部の搅乱層を全て

取り除き、精査を行った。

溝 SD376 東西方向の溝であるが、大半が搅乱を受けており、残存するのは南側のごく一部のみである。礎石建物 SB370 または同 SB002 に対応する建物の外周溝とは考えづらい位置である。周囲に掘込地業等の痕跡も確認できず、埋土からは遺物の出土もなかった。

溝 SD377 東西方向の溝で、検出面にて幅 2.5 m を確認したが、以北は搅乱を受けており全幅は不明である。位置としては礎石建物 SB002 の北側の外周溝（SD365）に対応してもおかしくはないが、周辺の遺構検出状況からそのようには考えづらい。検出面上面や断面確認のためのサブトレンチにて、少量ではあるが平瓦の小片の出土が認められた。

土坑 SX378・379 1 レンチの中ほどに位置する搅乱土坑である。1 レンチ南端を始点に 5 m 間隔で搅乱層の除去作業を行っていたため、SX378・379 付近の出土遺物は「15 m～20 m」・「20 m～25 m」分として一括で取り上げてしまっており、正確な出土位置は分からなくなってしまっている。しかし、全出土遺物（須恵器 1 点を除き全て瓦）の半数に迫る量がこの範囲から出土していることから、廃棄土坑か、あるいは瓦葺建物が存在した可能性が考えられる。なお SX379 については北側のラインが比較的明瞭に検出されており、加えて西壁断面の北端隅にて均質な黒色シルトや地山粒混じりの黒色シルトの堆積が若干確認できることから、東西方向の溝の名残である可能性も考えておきたい。

(3) 2 レンチ

長塚南東区東半において礎石建物 SB002 の対となる建物の存在を確認するため、6AFG-B 区に幅 2 m × 延長 35 m の東西方向トレンチを設定した。

重機にて表土除去を行ったところ、分厚い搅乱層が確認された。1 レンチと同様、一旦は前年度調査の遺構検出レベル付近まで掘り下げ、その後西端にて 1 m × 1 m の深堀りトレンチを作成し地山面の確認を試みたのだが、ピュアな地山面が現れたのは現地表面からおよそ -0.9m も掘り下げた地点であり、1 レンチ周辺よりさらに深く搅乱を受けていることが判明した。その後、トレンチ北半の搅乱層を重機にて全て除去したが、搅乱土坑以外の落ち込みは確認されなかった。東端から 13 m 前後に至っては地山下層（礫混じりのにぶい黄褐色砂質シルト）が露出するほどで、想定された遺構は全て削平されてしまったものと考えられる。

(4) 出土遺物

須恵器甌の小片 1 点を除いた全てが瓦であった。溝や、瓦がまとまって出土した搅乱土坑 SX378・379 について

も完掘は行わなかったため、出土量は 1・2 レンチを合わせてコンテナバットに 4 箱分と非常に乏しい。唯一遺構に伴う遺物として SD377 サブトレンチから出土した平瓦 7 点が挙げられるが、いずれも小片のため詳述には及ばず、そのほかは全て表面採取または搅乱層からの出土で原位置を留めていない。しかしながら重圧文軒丸瓦や押印平瓦など伊勢国府特有の遺物も数点見受けられる。礎石建物もしくはそれに相応する格式の建物の存在が考えられるが、あくまで可能性の域を出ない。これらのほか、比較的残りの良い遺物についても以下に記す。

重圧文軒丸瓦（1）最も内側の圧線が欠損しているがおそらくは外縁を含め三重となる。瓦当径はおよそ 16.8cm、外縁外径から第 2 圧線外径までの距離は 3.0cm を測り、IA3 型式に該当する。第 2 圧線の断面形は半円状を呈し、幅は 2 mm 程度、高さは 3 mm 程度である。裏面は丁寧なケズリ調整を施す。焼成はやや甘く灰色を呈する。1 レンチ南端の表土除去時に出土。

押印平瓦（2）一枚作りの平瓦。凸面は縄目叩きを施し、中央付近に押印される。印は外径約 2.5cm の正円形で、内側にやや小さな円が巡り二重となり、さらにその中に「水」らしき陽刻が見えるが極めて不明瞭。印上部の線状の凹みはヘラ等が当たった痕跡か。凹面は布目圧痕をナデ消すが粘土板切り出しの糸切り痕を留める。焼成は甘く、灰白色を呈する。1 レンチの表土除去時に出土。

平瓦（3）一枚作りの平瓦。乾燥時に自重で歪んだためか全体的に歪にカーブする。凸面に縦方向の縄目叩きを施すものの、粘土板切り出しの糸切り痕を留める。凹面は布目圧痕をナデ消すが粘土板切り出しの糸切り痕を留め、側端部には約 7.5cm と幅広のケズリ調整を施す。側面は 2 面に面取りされる。焼成は良く、灰色を呈する。2 レンチ表土除去時に出土。

丸瓦（4）玉縁式の丸瓦である。瓶形の内型に粘土帯を貼り付けて筒状に形成したのち、内面側に刃物で割線を入れて半裁することにより作成される。側縁の調整は行われず分割時の割線とバリがそのまま残る。凸面は表面が荒れており不明瞭ではあるが、縄目叩き痕をナデで丁寧に消す。内面には布目が残り、縫い目も確認できる。焼成は甘く、全体的に灰白色で、玉縁付近は灰色を呈する。SX378 から SX379 南端までの間の搅乱層から出土。

IV まとめ

第 41 次調査では、北方官衙方格街区の長塚南東区の東半部を調査の対象とし、同西半部における過年度の調査成果を踏まえ、街区の中心軸に対して東西対称に建物が配置されているというこれまで想定されてきた前提が正しいかどうかの確認を試みた。結論から述べれば、今

回の調査ではこの前提の確実性を裏付けることはできなかった。

まず、調査対象地が広範囲にわたって著しく搅乱されていたのは非常に残念なことであったが、1トレンチ北側では溝SD376・377の埋土がかろうじて残存していることが確認できた。基底面のレベルはSD376が49.262cm、SD377が49.181cmで、SD377が約8cm低い。位置的にはSB370外周溝に対応する遺構として捉えられなくもないが、断定に足る成果は上げられなかつた。

また重機での表土除去時、1トレンチ南端から重圈文軒丸瓦が、位置は不明であるが同じく1トレンチから押印平瓦が出土したことも特筆すべき点である。どちらも伊勢国府を特徴付ける瓦であり、東半部の瓦葺建物の存

在を裏付ける材料となるかもしれない。

なお、2トレンチに至っては地山下層が露出するほどの搅乱深度であり、遺構は全て削平されてしまっているものと考えられるため、SB002との対応関係については不明である。また出土量もコンテナバット1/3箱程度と極めて少なく、過去の土地利用の際に遺物ごと土を運び出したのではないかと考える。

冒頭にも述べたとおり、同じ区画内において東西対象に建物が配置されているという考え方の確実性については、残念ながら今回の調査では確認することができなかつた。しかしながら北側隣接地の未調査域に関連遺構が広がる可能性が十分に考えられることから、今後はこちらを調査対象地とし、引き続き建物の配置関係の解明に努めたい。

[伊勢国府関連参考文献]

- 浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）』鈴鹿市教育委員会
石田浩司・杉立正徳・林和範 2001『基盤整備促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 天王山西遺跡 三宅神社遺跡 梅田遺跡』鈴鹿市教育委員会
宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
宇河雅之 1997「伊勢国府の方格地割」『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター
小倉整 2006『伊勢国府跡8』鈴鹿市考古博物館
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』鈴鹿市教育委員会
杉立正徳 1997「長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市考古博物館 2002『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007「富士遺跡（第2次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2007『伊勢国府跡9』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2009『伊勢国府跡11』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2010『伊勢国府跡12』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2011『伊勢国府跡13』鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2016『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1997「三宅神社遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡一長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1996『伊勢国分寺・国府跡』3 鈴鹿市教育委員会
新田剛ほか 1997『伊勢国分寺・国府跡』4 鈴鹿市教育委員会
新田剛 1998「長者屋敷遺跡発掘調査概要（9次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V』鈴鹿市教育委員会
新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2000『伊勢国府跡2』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2001『伊勢国府跡3』鈴鹿市教育委員会
新田剛 2002『伊勢国府跡』『伊勢国府跡史跡指定記念ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2004『付論・伊勢国府・国分寺系文字瓦』『企画展 文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2004「伊勢国府とその周辺の重圈文軒丸瓦考 -伊勢国府・鈴鹿関・鈴鹿駅家・河口関を考えるための観書-」『かにかくに』三星出版
新田剛 2006「伊勢国府跡と大角遺跡における重圈文軒丸瓦」『考古学雑誌』90-3
新田剛 2011「伊勢国府の成立」『古代文化』第63卷第3号 財団法人古代学協会
新田剛 2011『伊勢国府・国分寺跡』同成社
新田剛 2012『伊勢国府跡14』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2013『伊勢国府跡15』鈴鹿市考古博物館
新田剛 2014「伊勢国庁と関連遺構」『駒澤考古』39
新田剛 2014「東海地方の重圈文系軒瓦」『古代瓦研究6 大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開』奈良文化財研究所
新田剛 2015「東海道 伊勢」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会 吉川弘文館
新田剛 2018「東海地方西部の一本づくり・一枚づくり伊勢国府国分寺の所要瓦を中心として」『第18回シンポジウム8世紀の瓦づくりVII-一本づくり・一枚づくりの展開1-発表要旨』奈良文化財研究所
新田剛 2020「伊勢国府 国府と方格地割」『季刊考古学』152 雄山閣
新田剛 2020「伊勢国府跡における平瓦一枚づくりの製作痕」『生産の考古学III』駒澤大学考古学研究室
林和範 2006「平田遺跡（5次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
藤岡謙二郎・西村睦男 1957「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群・軍團跡の問題と附近の開発をめぐって-」『史迹と美術』第279号
藤原秀樹 1997「三宅神社遺跡（第2次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報III』鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹ほか 1995『伊勢国分寺・国府跡2』鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹 2014『伊勢国府跡16』鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2015『伊勢国府跡17』鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2016『伊勢国府跡18』鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 2017『伊勢国府跡19』鈴鹿市
藤原秀樹 2018『伊勢国府跡20』鈴鹿市
藤原秀樹 2019『伊勢国府跡21』鈴鹿市
藤原秀樹 2020『伊勢国府跡22』鈴鹿市
藤原秀樹 2021『伊勢国府跡23』鈴鹿市
水野福松 1907『高津瀬村誌』
水橋公恵 2005『伊勢国府跡6』鈴鹿市考古博物館
水橋公恵 2005『伊勢国府跡7』鈴鹿市考古博物館
村山邦彦 1992「鈴鹿市廣瀬長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』128号 古代学研究会
吉田隆史 2009「富士遺跡（第3次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第11号 鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2002『伊勢国府跡4』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2003『伊勢国府跡5』鈴鹿市教育委員会
吉田真由美 2004『伊勢国府（17次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第5号 鈴鹿市考古博物館
吉田真由美 2017『特別展 道でつながる古代の役所』鈴鹿市考古博物館

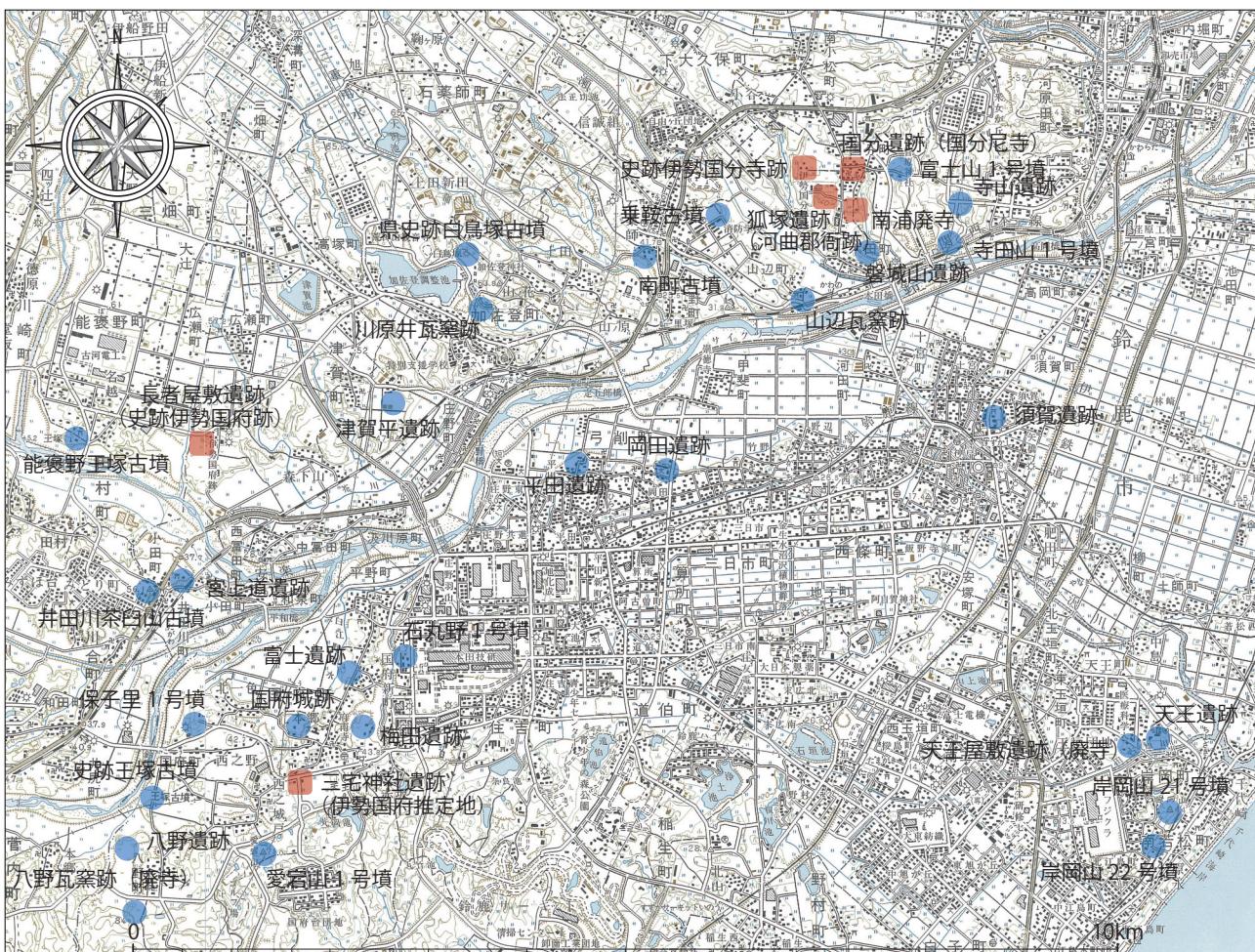


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:75,000)



Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡 (1:200,000)

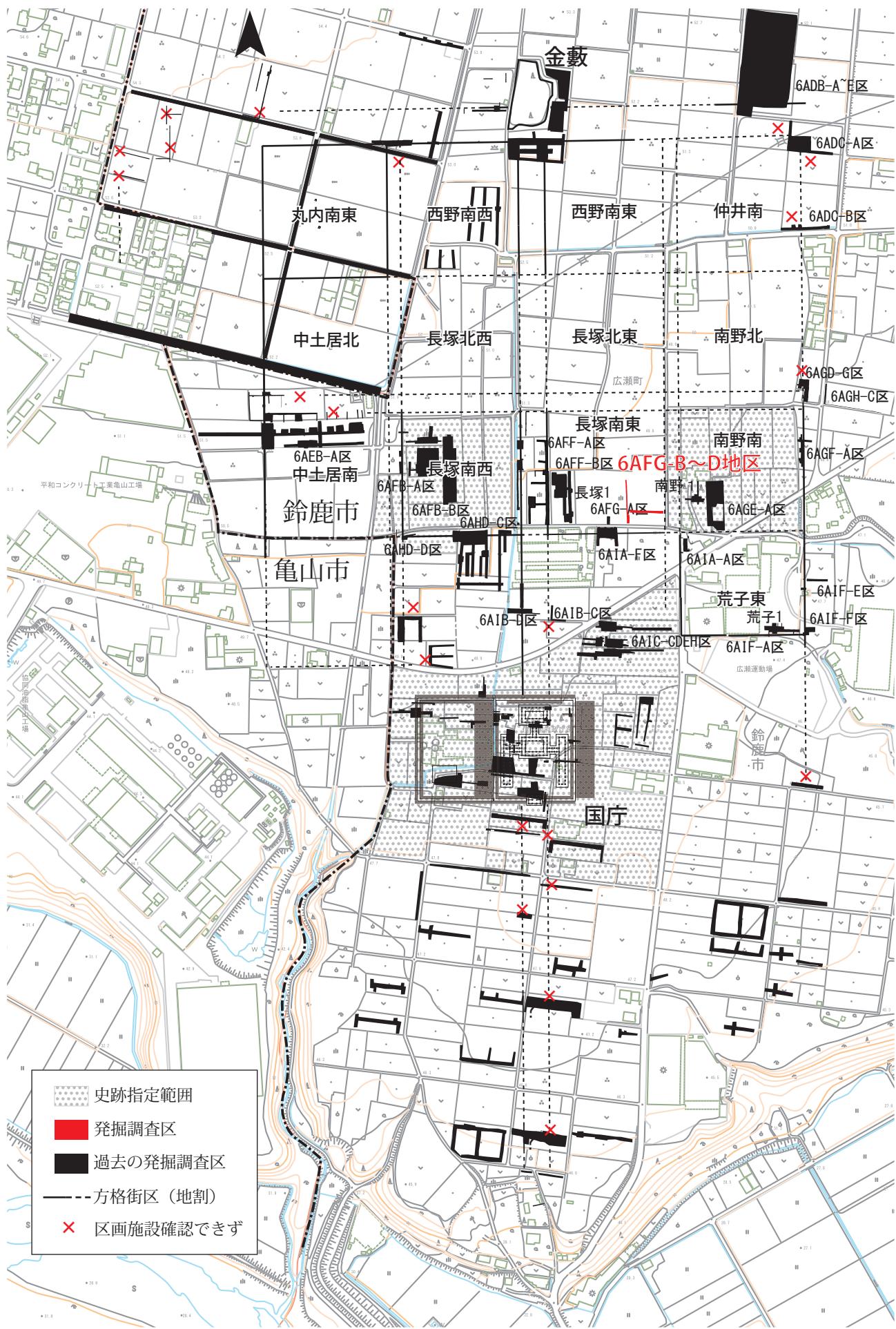


Fig.3 調査区位置図 (1:5,000)

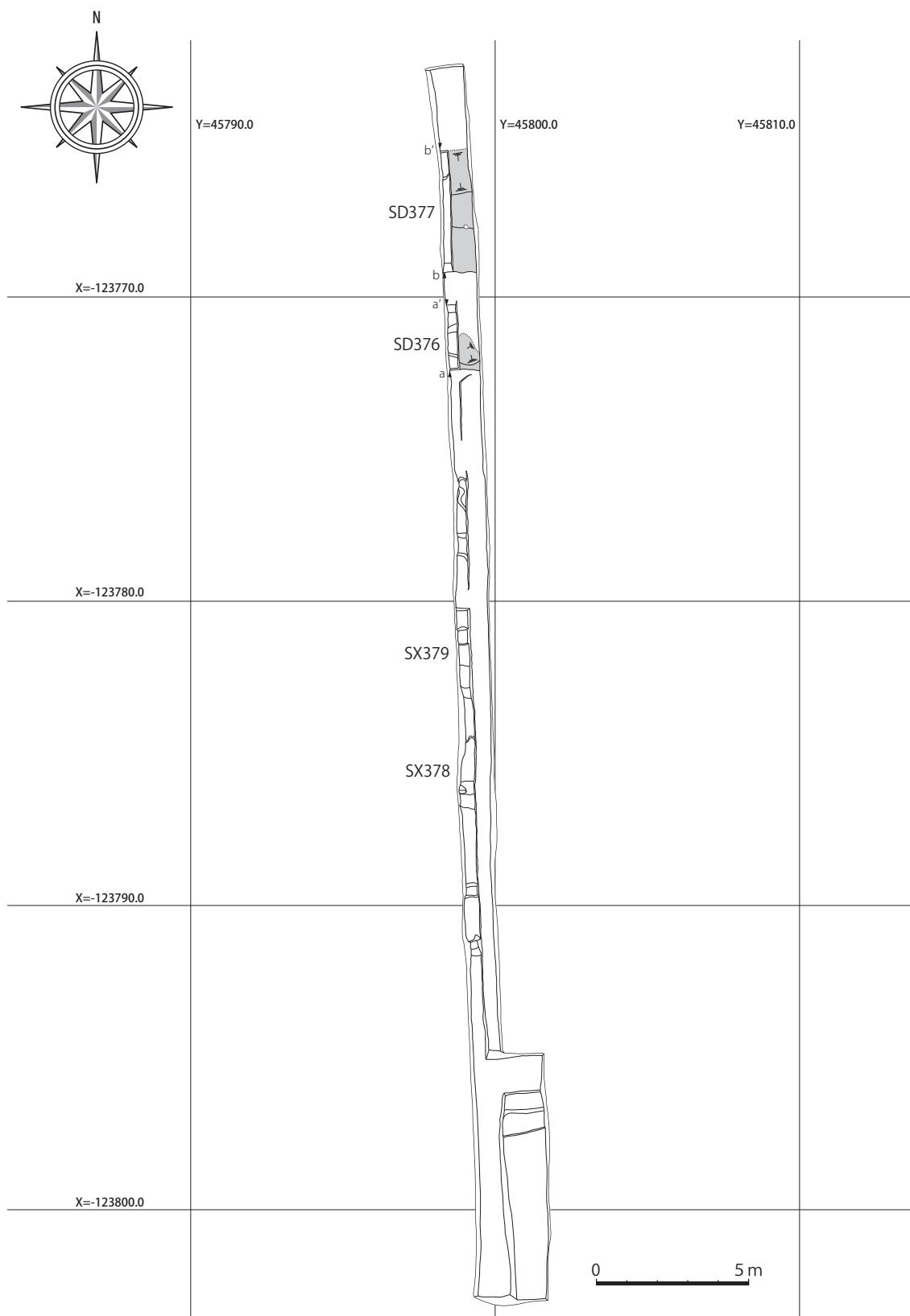


Fig.4 6AFG-B・C・D区 1トレンチ遺構配置図 (1/200)

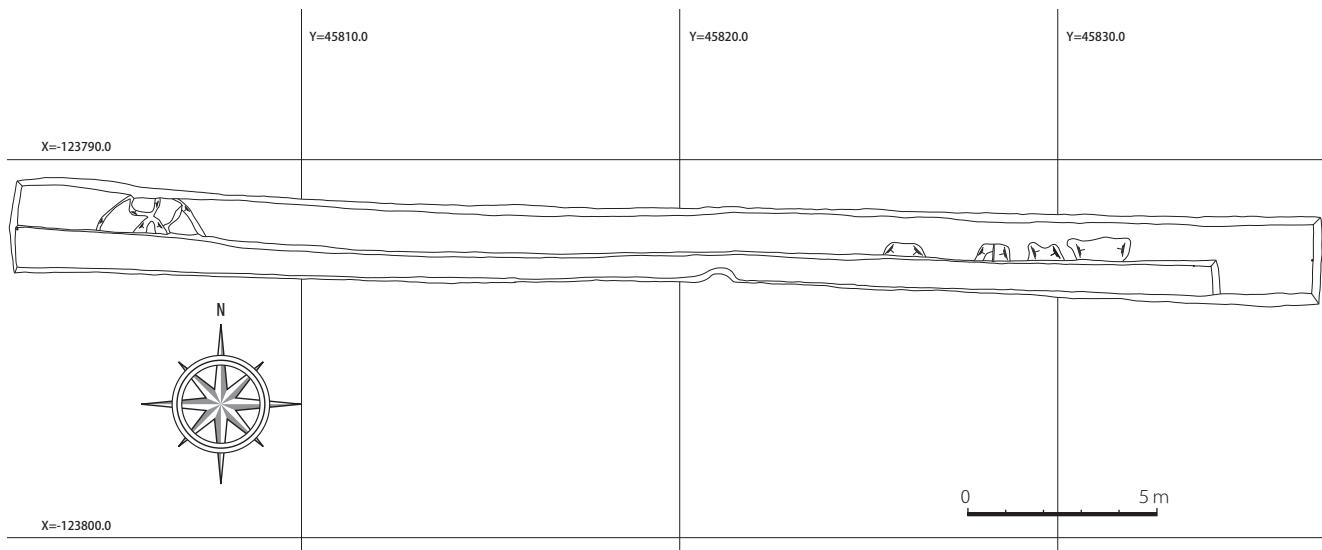
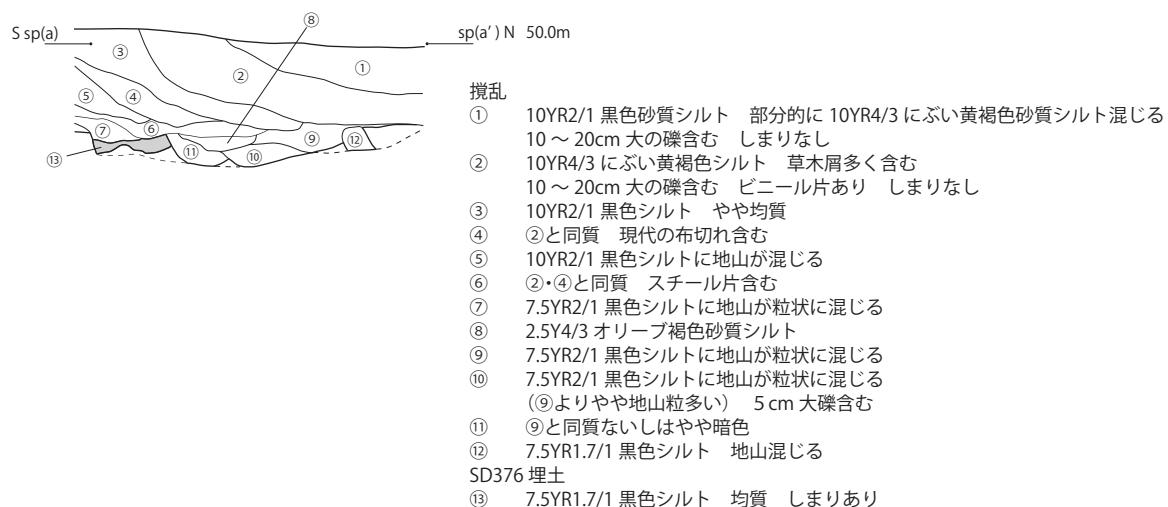


Fig.5 6AFG-B区 2トレンチ遺構配置図 (1/200)

溝 SD376



溝 SD377

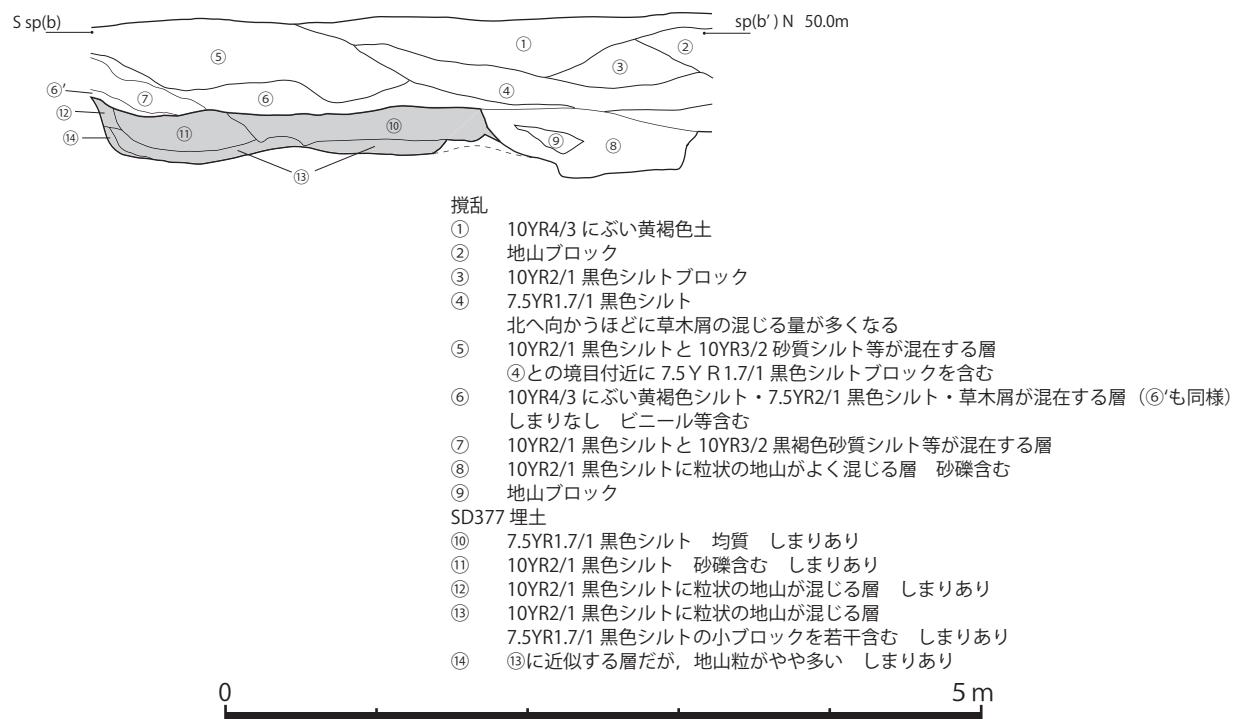


Fig.6 溝 SD376・SD377 土層断面図 (1/50)

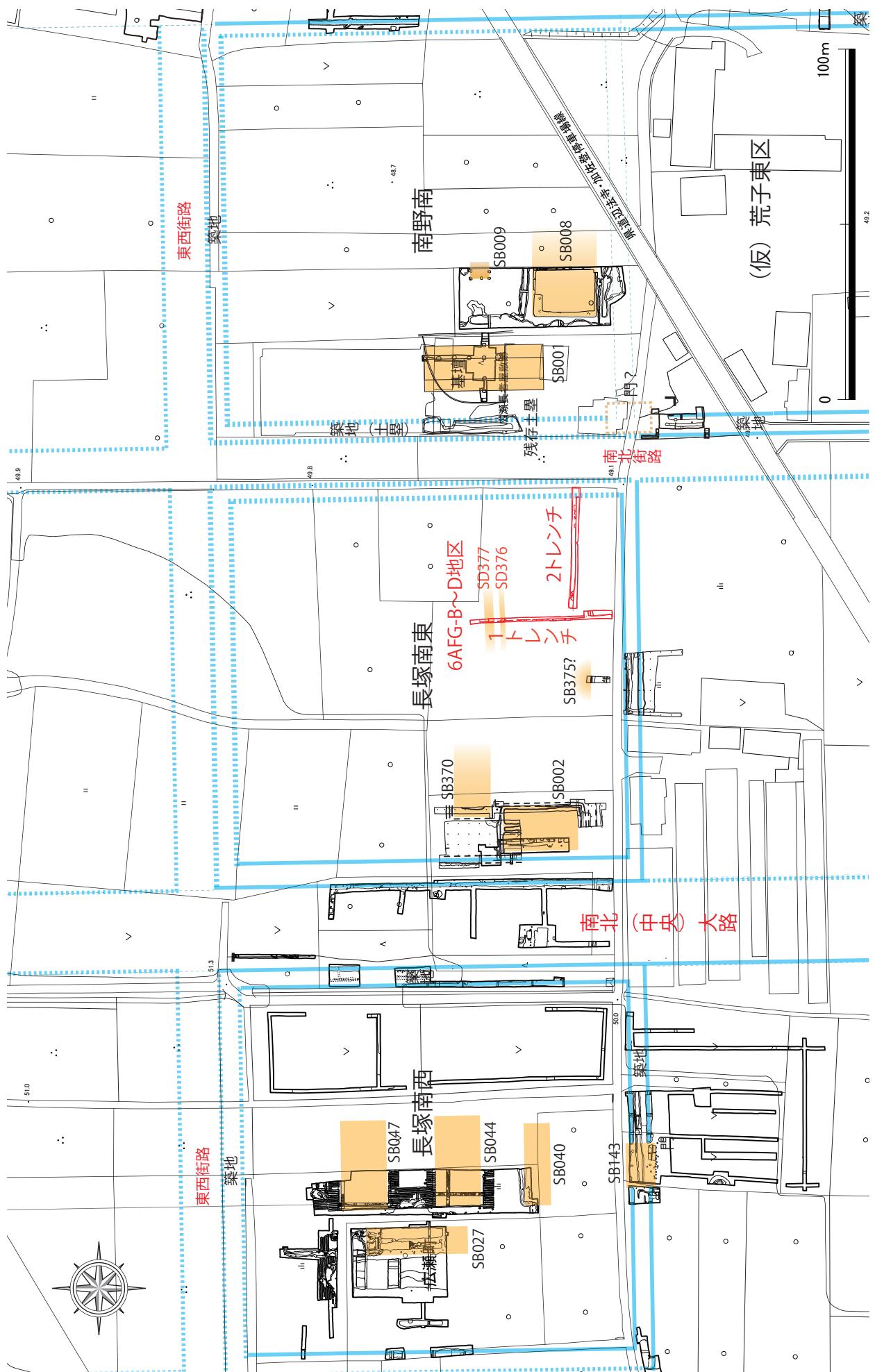


Fig.7 北方官衙 長塚南東区周辺で確認された建物（1/1500）

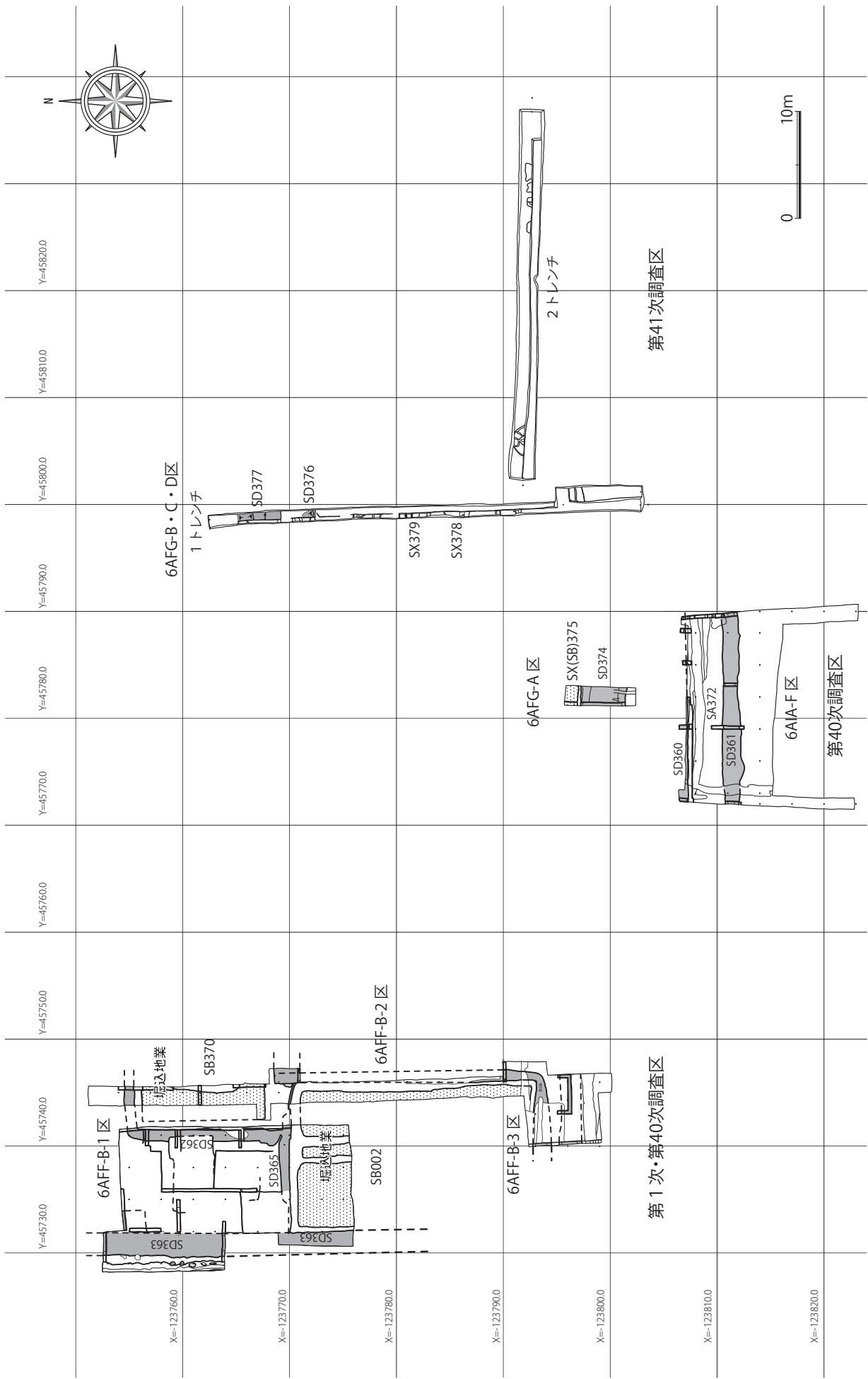
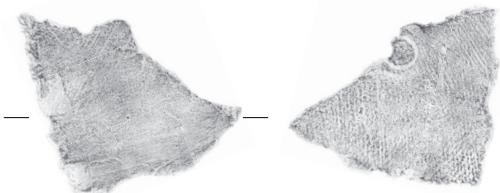


Fig.8 北方官衙 長塚南東区内で確認された建物 (1/400)



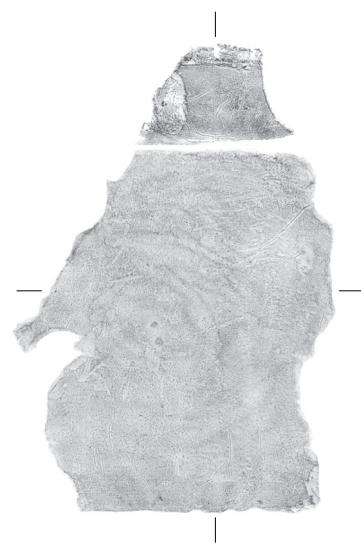
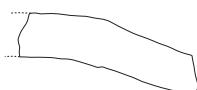
1



2



3



4

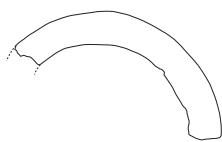


Fig.9 出土遺物実測図 (1/6)



1トレンチ全景（南から）



1トレンチ全景（北から）



溝 SD376（東から）



溝 SD376（南から）



溝 SD377 南半（東から）



溝 SD377 北半（東から）



溝 SD377（南から）



土坑 SX378（東から）



土坑 SX379 (東から)



手前：土坑 SX379 奥：土坑 SX378 (北東から)



2トレンチ全景 (西から)



2トレンチ全景 (東から)



2トレンチ西端搅乱 検出状況 (北から)



2トレンチ西端搅乱 完掘 (北から)



3



4

Tab.2

報告書抄録

ふりがな	いせこくふあとにじゅうよん							
書名	伊勢国府跡 24							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	前田有紀							
編集機関	鈴鹿市文化スポーツ部文化財課							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	2022年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡 第41次)	鈴鹿市 広瀬町字長塚 1252番1 1254番 1255番	24207	363	34° 53' 11"	136° 29' 51"	2021年 11月15日 ～ 2022年 2月14日	136.97	学術調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
官衙	奈良・平安	溝		重圈文軒丸瓦・平瓦・丸瓦 須恵器			伊勢国府跡北方官衙方 格街区の長塚南東区に おける調査。溝2条の 底部の残存を確認。	

伊勢国府跡 24

発行日 令和4(2022)年3月31日
 編集・発行 鈴鹿市
 文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループ

〒513-0013

三重県鈴鹿市国分町224番地 鈴鹿市考古博物館内

TEL 059(374)1994

FAX 059(374)0986

E-mail : bunkazai@city.suzuka.lg.jp

印刷 株式会社三ツ星 鈴鹿営業所

Ise Kokufu Site

Preliminary Report No.24

March, 2022

Suzuka City